

詠む広場

毎日俳壇

小川 軽舟選

西村 和子選

井上 康明選

片山由美子選

新刊の頁の呼吸冬来る

大阪 芹澤 由美

△評▽新刊書を開くと紙とインクの香りが立つ。それを呼吸と表して、書物と出会う喜びを感じさせる。季語もよい。

寒暄や駆けたる馬のごとき雲

町田市 練木 智美

△評▽暁光を浴びてたてがみをなびかせるように雲が進む。高揚感のある力強い自然詠だ。

雪たるま日に爛れるてつれさる

大野城市 野分 のわ

熱燭や戦に出づる夜のごとき

帯広市 柏木 七歩

冬めくや森の匂ひのドイッパン

加古川市 石村 まい

遠州灘一望したる照葉かな

名古屋市中区 山内 基成

浮雲に陰影のあり風邪籠

米子市 長田 遼平

熊出てて地方創生まなならず

香川 佐藤 浩章

気に入りの椅子を持ち寄り日向ぼこ

高知 渡辺 哲也

色褪せし蛇屋の看板冬川原

横浜市 石川由美子

寝静まり仮面を外すクリスマス

相模原市 はやし 央

△評▽実際の仮面か、比喩か。家族も町も寝静まった後の、素顔に戻る瞬間を捉え、人間の二面性を思わせる作品と読んだ。

子等連れて靴屋三軒冬支度

高山市 直井 照男

△評▽それぞれの寸法に合った雪靴を買ったのだろうか。報告のようだが、季語が多くを語る。

垂直に冬の虹立つ川向かふ

西宮市 平田 あい

香る間は駅まで歩く金木犀

神戸市 橋口 正子

紅葉狩り集合場所は無人駅

西海市 まえだいっそう

絨毯を四角く曲がる裁判所

さいたま市 與語幸之助

満天の星をひろひて焚火かな

葛城市 山本 啓

紅葉散る昨日の憂ひそのままに

岡崎市 加藤 幸男

年経ひて益々白し枇杷の花

伊勢市 奥田 豊

しるるや耳を澄ませば翅の音

大阪 芹澤 由美

吹き晴れて山の向かうの雪嶺見ゆ

相模原市 小山 鞠子

△評▽木枯らしが一晚中吹いた朝、山の向こうに雪嶺が見える。良く晴れた、穏やかな風のない朝。雪嶺は神々しく見えるのだから。

幼子の眸の中の象

小平市 中澤 清

△評▽動物園の象を見た幼子のひとみに、象が映り込んでいる。冬晴れの日の澄んだ大気を感じる。

極楽を行き先と決め日向ぼこ

横浜市 瀬古 修治

枯草や塩田跡の土埃

相模原市 はやし 央

落葉踏む己の内を歩みゆく

甲府市 清水 輝子

冠雪に向きて駅出る年の暮

市川市 高野 厚夫

命ひとつまたひとつ燃ゆ冬銀河

津島市 中川 晶子

小雪や母の通ひし不動尊

岸和田市 掃部 敬治

綿虫の綿残したるたなごころ

川越市 益子さとし

豪雪に耐えし根曲がり杉の森

倉敷市 中路 修平

理科室に剥製ふたつ冬に入る

土浦市 今泉 準一

△評▽鳥類か小動物か、いささか古びた剥製が置かれている理科室。動くことのない剥製はうつろでどこか寒々しさを感じさせる。

梢まで上り詰めたる鳥紅葉

川越市 大野有之介

△評▽木にからみついたツタがてっぺんにまで到達。炎のように色づいたようすが目に浮かぶ。

雨ながら明るき空や石路の花

和歌山市 曾根 澄子

対岸にもの焼く煙雁渡し

和歌山市 宮本 啓子

チェンバロのバッハの響く小春かな

国立市 中村富士子

なみなみと注ぐ珈琲今朝の冬

横浜市 斎藤 山葉

ここからは各駅停車山眠る

津山市 森下 弘

毛糸編むわたくしに声掛けしないで

平塚市 門脇 明子

指定席は靴箱の上室の花

伊勢市 奥田 豊

小春日や窓辺の椅子にまどろみぬ

奈良市 伊東 勝

アプリで

推し短歌

アプリ「57577」の投稿からユーザー人気をふまえて歌人の天野慶さんが選歌と評を担当します。アプリは右のQRコードまたは<https://tanka.one/>からダウンロードできます。



短歌アプリ

57577

お題「雪」

・撫んだら消えちゃうからさ幸せの文字にゆきって読み方がある 北野白熊

「美幸」と書いて「みゆき」ちゃん、という同級生がいました。百人一首にも

「行幸」と書いて「みゆき」と読む歌が選ばれています。そんな風に身近に「ゆき」と読む「幸」があったのに、このつ

ながりには気が付きませんでした。深く納得する発見の一首です。

・泣きながらつま先立ちで夜を踏む雪に足跡としかたない 織部ゆい

涙の理由はわからないけれど、とにかく自分のことが嫌になってしまっています。真っ白な雪にふさわしくない、踏んだら汚してしまう……。でも、優しく雪を思いやることのできる心を持つ人は、大丈夫。あたたかな家まで、どうか転ばないよう、夜道をしっかりと踏みしめて。

・コロナ禍の街から音が消えたこと思い出すよな積雪の朝 くじらうち

あの、雪の朝特有の、窓の外のシンとした「空気」。清浄で冷たくて、布団まで届くその空気が付くと、子どもの頃は窓辺に駆け寄りました。外出自粛中の街も、生き物の気配がなくなり、世界がそっと終わったようでした。あれは確かに雪の朝の空気、とうなずきました。

※次回のお題「雪」(2月2日掲載)

